



発行元 紀南キリスト教会 和歌山県田辺市下屋敷町80 TEL/FAX0739-25-1191 E-Mail:kinar-ch@beach.ocn.ne.jp H・P:http://www.kinar-ch.org/



# 「わたし」

私は治る事の無い病氣と長く付き合っています。今の治療は進行を少しでも遅らせる事、昼夜休み無い痛みを少しでも軽減する事です。中学二年の六月からは始まど学校に通っていません。

病院初の患者で苦しい治療でした。あの頃は家族が大変だったと思います。「この病氣は再発は

しません」と医長先生から言葉を頂きました。それから他の病氣で六年毎に、入院・手術を繰り返していましたが、四十才になって有り得ない再発が分かりました。これも又、初の事で、再発と分かった時「血が逆流、血が凍る」まさにそうでした。丁度前回の入院から六年目でした。次々と病氣をする体が憎い、一生懸命に生きているのに神はなぜ守ってくれないのかと、神と自分を憎みました。皆に

心配をかけ続ける私なんか生きていても良いのか、ゴミでも一時は何かの役に立っているのに自分はゴミ以下だと思えました。莫大な医療費の事、辛い治療、そして今生きて来た日々が全部無くなってしまおうように思い、追い詰められて行きました。そんな日々、夢を見ました。ゴミ捨て場に立っている私の後ろに、上山牧師が立っておられて、次のような事を云って下さいました。「人間が見てゴミのよ

うに思う物でも、神様が造られたものは、みな意味があり、目的があり、貴いのですよ」その瞬間、目が覚めて讚美歌九十番「こも神のみくになれば」の曲が流れ、「わたしは貴女の行きたくない所に行かせ、したくない事をさせる」と言う言葉が頭に浮かび、そしてW・パークレー師の「神は何故、私をこのような目に合わせるのか」と言っている神は私に何をさせようとしているのかと

あつた。そこで家族一人一人と教会宛てに手紙を書くことにした。それは私を冷静にさせ、落ち着かせるのに大いに役立った。人は誰もがやがて死んでいく。それは確実であるが、その限られた時間というものは漠然としたものである。ところが、癌はそれを身近な現実のものとして強く意識させるものとなった。私にとって、神の存在をより意識した時でもあつた。

現在、病状は落ち着いているが、いつ転移が見つかるか予断を許さない。そのことはいつも頭から離れない。ただ、限られた命に少し猶予を与えられている。テレビもゆっくり見ることが出来るようになった。癌や死は辛く、苦しい経験で

母は「あんたが病氣ばかりするのは丈夫に産んでやれなかった親の責任や」とよく言いました。その言葉を聞くとき、何を教えられるような思いになり「それは違う、そんな事はない」と言う返事がきつくなります。ある日、母は又同じ事を言いつて自身を責めました。その時「お母さん、そんな事を思ったらあかんよ。それは違うよ。親やからそう思うのだから、子供の私から言うとうと、丈夫に産まれて来なくてゴメン、何時までも心配ばかりかけてゴメン」と思っているんですよ。でも病氣するから不幸ではないよ。皆のお陰で結構良い人生を歩んでる。大丈夫や。安心して」と話しました。

ある本で「貴女のその熱心(一生懸命)さが人を躓かせることがある」という様な言葉に出会った事があります。その言葉が気になっていました。私は高慢でした。何においても、出来る！しなければならぬ！やりましょう！との思いが強かったです。あれから何回も入院、手術を繰り返して、助け無しでは毎日の生活が難しくなりヘルパーさんに来てもらっています。この体で私に何をさせて貰えるか、出来なくなつてから出来る事に気がつく事がある、痛さを知って人の痛さを知ることが出来るの思い、病氣をして人の心の温かさ優しさ、人への気遣いを教えてもらいました。

# 『苦難の向い』

紀南教会牧師 上山耕司

「なすび売りの少年」という絵本がある。それは母親が小学生の息子に自宅で作ったなすびを売り歩くように厳しく言いつける実話である。少年にとつてそれはあまりにも辛く、泣く泣く毎日売り歩いた。鬼の母と思つた。しかし、母は自分が余命幾ばくもない病氣であり、自分の亡き後、息子が独り立ちできるようにと心を鬼にして、涙ながらに厳しくしたのであつた。

私は昨年、ガンを告げられて以来、手術をし退院するまで、これほど死を身近に感じたことはなかった。そして今、癌告知から一年が過ぎた。ほぼ手術前の生活に戻りつつある。入院中色々考えさせられた。神がおられるなら、何故、癌や

様々な病氣があるのだろうか、何故、死があるのだろうか。また、何故、台風や地震、津波、洪水といった自然災害があるのか。神が万物の創造者なら、そんなものまで造らなかつたら良いこと何か、を思い巡らすようになった。葬式のこ

を見ていた生活から、うしろからせき立てられるような、のんびり出来ない生活になった。時間が足りない。今、最優先にしなければならぬことは何か、を思い巡らすようになった。葬式のこ

あつた。そこで家族一人一人と教会宛てに手紙を書くことにした。それは私を冷静にさせ、落ち着かせるのに大いに役立った。人は誰もがやがて死んでいく。それは確実であるが、その限られた時間というものは漠然としたものである。ところが、癌はそれを身近な現実のものとして強く意識させるものとなった。私にとって、神の存在をより意識した時でもあつた。

現在、病状は落ち着いているが、いつ転移が見つかるか予断を許さない。そのことはいつも頭から離れない。ただ、限られた命に少し猶予を与えられている。テレビもゆっくり見ることが出来るようになった。癌や死は辛く、苦しい経験で

母は「あんたが病氣ばかりするのは丈夫に産んでやれなかった親の責任や」とよく言いました。その言葉を聞くとき、何を教えられるような思いになり「それは違う、そんな事はない」と言う返事がきつくなります。ある日、母は又同じ事を言いつて自身を責めました。その時「お母さん、そんな事を思ったらあかんよ。それは違うよ。親やからそう思うのだから、子供の私から言うとうと、丈夫に産まれて来なくてゴメン、何時までも心配ばかりかけてゴメン」と思っているんですよ。でも病氣するから不幸ではないよ。皆のお陰で結構良い人生を歩んでる。大丈夫や。安心して」と話しました。

ある本で「貴女のその熱心(一生懸命)さが人を躓かせることがある」という様な言葉に出会った事があります。その言葉が気になっていました。私は高慢でした。何においても、出来る！しなければならぬ！やりましょう！との思いが強かったです。あれから何回も入院、手術を繰り返して、助け無しでは毎日の生活が難しくなりヘルパーさんに来てもらっています。この体で私に何をさせて貰えるか、出来なくなつてから出来る事に気がつく事がある、痛さを知って人の痛さを知ることが出来るの思い、病氣をして人の心の温かさ優しさ、人への気遣いを教えてもらいました。

それでも、心も体もしんどくなり「消えてしまいたい」と思う時があります。神様に文句や恨み事を言い、

# 「災害」

最近は大雨の影響で道路が冠水したり、川が氾濫して街が泥水で埋まっています。人不知

ニュースを見ていると、最近は大雨の影響で道路が冠水したり、川が氾濫して街が泥水で埋まっています。人不知

に帰ろうと頑張っておられる姿を見ると、人間の凄さを強く感じました。続いて、水害の方ですが、記憶に新しいのは、福岡での豪雨災害や、紀南地方でも、丁度「東日本大震災」のあつた年の九月ごろに、台風の影響だつたと思いますが、大雨が降つて、川が増水したり、栗栖川の方で、大規模な土砂崩れがありました。その当時は消防団員で、雨で増水した会津川を一夜中監視しました。夜だったこともあり、よく見えなかつたのですが、水が橋の道路付近まで増水したり、堤防の低い部分は越水して、その辺りは冠水してしまつたり、大変でした。先輩の団員の方も「ここまで増水するのは、滅多にない」とおっしゃっていました。



「この病氣は死で終わるものではない。神の栄光のためである。」(聖書・ヨハネによる福音書11:4)

また、大きな地震が起きて津波が発生したり、土砂崩れがしようじたりするものもよく見ま

九州では熊本で大きな地震が起こつたり、福岡では大雨で川が氾濫したり、鹿児島では桜島が噴火したり、立て続けに災害が起きています。私たちが住む町も、いつこのような災害が起こつてもおかしくないです。日頃から備えをしておくことが大事だと思

今年も夏も大変な暑さでしたが、少し秋を感じる様になりまして。次号は「寒い」が口に出る頃、十一月二六日(日)です。